

武田泰淳論

立石
伯

武田泰淳論

立石
伯

たけだたいじゆんろん
武田泰淳論

一九七七年十一月十六日第一刷発行

著者——立石 伯
たていし はく

© Tateishi Haku 1977, Printed in Japan

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—〇三—一二 振替東京六—三三〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

目次

序説 暗い眼差しの視界

7

存在と論理

——『富士』における作家的流血——

21

歴史と人間

——『司馬遷』と〈絶対持続〉——

50

滅亡と天啓

——敗戦後の短篇群と忘却の意志——

78

文学と革命

——中国、その無限の苦悩とあこがれ——

105

宗教と思想

——『快樂』の蠕動運動の方向——

134

文学と形而上学

——作品が促す彼方——

167

苦しみを求める心

——武田泰淳追悼——

199

装
幀・平
島
崇

武田泰淳論

序説 暗い眼差しの世界

武田泰淳は文学の貴重な謎と秘密を胸中に秘めたまま死んだ。その秘密の一つは、書く行為と作家のあり方についての問である。氏は自己の体力と「脳」力に挑戦するかのようにな、私のもっとも愛好する『富士』を、薬品と酒で意識を極度に緊張・集中・持続させながら書きあげた。この書きぶりはかつてのシュールレアリストに似ていなくもなかったが、二十数年にわたる氏の書く習慣と特異な体質の故だったと簡単に考えておきたい。出来ばえはただ見事で、自己の数々の作品、自己をとりまく無数の作品と闘った作家の精神の流血がそこかしこに見られた。氏の一到達点がまさしくここにある。私たち読者は、その飛沫を浴びて、文学と作家のある宿命というべきものを黙考せざるをえなかった。だが、その後、『富士』で極度の頭脳の酷使を強いられた作者が脳血栓という重病におちいったとき、精神を肉体の裡にひろげている人間存在の基本的な在り方について熟考

させられることになった。この序説で展開するには手にあまる難題である。

さて、氏は若年の折僧職を捨てた。お布施と仏教的教義の間の、現実的・歴史的関係の解明が充分にできなかったのも理由の一つであった。だからこそ、加行後の僧職をへ僧侶商売（『迷路』）と自嘲せざるをえなかった。この大概は他章で闡明するので、ここではお布施と原稿料に話し及んだ椎名麟三との対談の一節を引用しておきたい。「それはね、生活に偽りがあるわけですよ、お布施をもらってね。原稿料というのもお布施だと思われども。ぼくは絶対に原稿料に対しては文句が言えないんですよ、原稿料はもらうものですよ、自分が獲得するものじゃないわけですよ。だって、価値といたって、ないわけですよね。」（『救いと文学』）この序説で問題としたのはこの後半部なのである。つまり、原稿料がお布施と同質のものであるならば、外形こそ違え作家も（異形の者）であり、（作家商売）という自己批判が常に念頭にあったことになるのではなからうか。それとも、お布施と原稿料が似ていても、僧侶の（生活に偽り）があり、作家の生活に（偽り）がないということになるのだろうか。

次にもやはり対談を引用する。

「三島 僕はいつも思うのは、自分がほんとに恥ずかしいことだと思うのは、自分は戦後の社会を否定してきた、否定してきて本を書いて、お金もらって暮してきたということとは、もうほんとうに僕のギルティ・コンシャスだな。」

武田 いや、それだけは言っちゃいけないよ。あんたがそんなことを言ったらガタガタ

になっちゃう。

(中略)

武田 いやだろうけど、それは我慢していかないと……。

(中略)

武田 だって、小説だって、あの長いもの書くのに、強気でなければ書けないよ。」「〔文学は空虚か〕

とすれば、〈強気〉と〈我慢〉という処世術めいた対処法のみで、「職業的」作家と原稿料と作品の問題を未解決のまま、ないしは解決の必要性を認めないまま、氏のような敏感で洞察力のある作家が無自覚に書きつづけたということになるのだろうか。いいかえるならば、書く行為自体と作品そのものが一種の詐術だからとわりきり、この詐術を深めることが書く行為であり作品でもあると主張できるであろうか。勿論そういう面がないわけではない。だとしても、反省された詐術は詐術とは異なってくる。氏は次のように述べたことがあった。「ただし、ぼくが詐欺行為と無関係かと言うと、そうではないように思われる。むしろ小説を書いて暮している、どうしても詐欺に似た行為と離れられないのではないかという気持が、たえずつきまとう。これは自分だけの体験にもとづいて言うのである。小説家はことごとく詐欺漢だなどと言うつもりは、全くない。」(『鬼の耳と風の齒』)この述懐は三島由紀夫の「ギルティ・コンシャス」と似ている。といっても、根本的に異質なのは、あの〈我慢〉と〈強気〉がこの述懐を裏から支えているためである。既にして

「詐欺行為」とは、遠い位置にある、ということが出来る。

「人間は誤解される動物である」という氏の定義に従えば、如何に誤解、曲解されても、自分が書くべし、作品化すべしと選択したものは、書き通さねばならない。書く途中で、それが「詐欺行為」かどうか恐らく誰一人解りはしない。また、原稿料を目的に書いているのでもない。書いているとき、作家は書いていること、行為していることなどを意識化することはできない。書いてしまってから、書いたものに対して責任をとることしかできない。とすれば、氏が述べたあの余りにも単純すぎる処世術に似た二語、「我慢」と「強気」は、書いている作家を支える肝要な力ということが出来るようになる。作品の価値の有無もにわかに判断できぬものであってみれば、作家はますます「我慢」と「強気」で書きすすめるしかないのである。

カフカは作品が商品化され金銭に換算されるのをひどくいとった。彼は文学だけ、書くことだけが問題であった。死後原稿の焼却を依頼したのも、自分の作品は断片、なぐり書き、未完成であって、人々の眼に触れられなくなかったからである。「もともと全く私的な手記や筆のすざびにすぎぬものが、結局出版されてしまいます。私の人間としての弱点の個人的な証拠書類が、印刷され、しかも売りに出るので。マックス・ブロットを筆頭に、友人たちがそれを文学に仕立て上げようと妄想しているためであり、私に、孤独の証言を破棄するだけの力がないためです」(グスタフ・ヤノーホ『カフカとの対話』吉田仙太郎訳)。彼はあの優れた『死刑宣告』が一夜の亡霊である、といった。書いている夜の時間だけが

彼にとつての生の時間であつた。その時間に産出されたものはその生の「亡霊」でしかない、ということになる。つまり、「孤独の証言」のみが彼にとつて問題であつた。

ところで、武田泰淳は、その作品を「亡霊」だとか「孤独の証言」だとかいわなかつた。氏にとつては、「罪の匂い」のする危険物であつたり、「恥ずかしさ」をもたらずものであつた。また、書く行為はものを創りあげる労働でも、価値を生みだす行為でもないのみなしてゐた。そこには何らの目的も功利的な意識もなかつたということになる。人間は生きてゐるのではなくて、何かに生かされてゐる、何ものかに在らされてゐるという氏の考えから推察していけば、氏は、何かに書かされてゐる、書かざるをえない在り方で在らされているということになる。つまり、善悪、正邪、絶対者と奴隸、自由と不自由のような矛盾状態や条件を強いられてゐても、「息が止まるまで」書かされてゐる。そのため、きわめて意識的、論理的な言葉の操作と精神生活の集中も、氏にあっては、呼吸作用と近似的何か、といわざるをえない。「私は呼吸しています」ということは人間にとつてめつたに起りえない。「お前は今呼吸しているね」「そうだ」と答えるときに自分の呼吸作用に自覚的になるものであらう。それと同様、「お前は今書いているね」「そうだ」と答えるときに自分が書いていることに意識的になるはずである。とすれば、なぜ書くか、いかに書くか、書く行為とは何かなどと論理化する必要がなくなつてくる。というよりも、論理化せざるをえないけれども、その論理に縛られないで、論理自体を放棄せざるをえないのだ、というべきであらう。つまり、氏が変化するものに対するとき、こちら側が常に発明、発

見を心がけねばならぬ、といったのも、固苦しい論理化を拒否するためであった。書くことをシステム化しないで、対象の真実によりそってそれを書き表す方法を發明しつづけることを意味した。書くことと論理の間の中間地帯、そこは氏にあってはあの〈我慢〉と〈強気〉が支配している。そして、その領域を論理と体系で枠組みをはめないで、中性化しておいたとき、氏は書く行為に呼吸と同じ生の自覚を感じつづけていた、ということが出来る。それは、ペンの融通無碍の別名なのである。

脳血栓で倒れた後も、氏が数々の対談でその生と人間と思想と文学に特異な視点から光をあて、あるいは口述筆記の諸短篇によって自己の青春と老年の意味を探究したのも、氏独特の書く行為の一端といえることができる。氏は死に連続する癌による極度の疲労衰弱で病床につく前数ヵ月間に目まいの不快感に悩みながらも、『中国文学』と『近代文学』の不可思議な交流、短篇「歌」、小さな推薦文、「社会主義的指導者S氏と仏教者B氏との対話」などを書いた。武田百合子夫人は「書き写していると、機嫌よくしていたのではなく、衰えゆく体をじいっと我慢して頑張っていたのだ」とその日記に記していた。これはまさしく、書かされている、書かざるをえない在り方で在らされている状態を明白に語っている言葉ではなからうか。仏教という、あのへはからいを捨てること、さまざまな想念を忘れて、遂には書いていることも忘れて書きつづけている状態を、私は氏の文章に感じたのであった。

このことを次のようにいいかえることができよう。人は書かせる何か、生きさせる何か

に従順に見えるが、実は、それに対して反抗、反逆の意志を秘めている。つまり、この抵抗感がその人の生や書く行為を支えている。抵抗しつづける〈何か〉の面貌を一瞬間なりとでも覗見してしまおう、その本源に接近しようと目論んでいる。その何ものかは、無自体や顔のないものであるかもしれない。にもかかわらず、この意志の全体的統御による発見の総体こそが、その人の生と書く意味を結果的に明かすのである。そして、武田泰淳の書く行為が発見であり、人間と世界の在り方の普遍化、法則化であるのも、右に述べた点で明らかにするはずである。

このことは同時に、氏が拒否していたに違いない〈祈り〉という觀念に私たちを導いていく。氏が諸行無常という真理を承認したのは、諸行無常と常にあらがいつづけていたということを意味するが、このあらがいの実質は、人間の生の卑小、醜悪さ、不安などにはじまり、悪、罪、救済、死、無などまでを深思することであった。仏教的に言えば、〈空〉について考えないで〈空〉そのものを熟考しつくすということであった。このとき、私は、氏が決して表に出さない祈りで自己と衆生と世界と宇宙について祈りつづけていたのではないか、と感じる。多くの人間は虐げられている、幼児すら悲嘆にくれている、生・老・病・死に悩みつづけているのだから。あらゆる事柄に鋭敏で含羞はなはだしい氏は、いわゆる表面的な祈りを拒絶するような祈りの形を、人眼にたたぬよう作品の裡に形式化していたのではなかったか、といったと思う。「何という無数の祈りが、ここにこめられていることだろうか」(「短篇小説の無限の面白さ」)と氏は、他の作家の作品のなかに〈祈

り」を見出していた。そのため、人類のひそやかな希望や願いを、あるいはそれに対する「祈り」を私たちが氏の作品のなかに見出すことが不可能でなくなる。精神病患者、ニセ札つかい、通り魔、殺人者、意識のおかす悪など、あるいは堪えつづけている衆生、苦しむ民族、滅亡する集団などを描出したとき、氏は苦しみ、痛み、不安、おののきを感じたはずだが——だからこそ逆説的に「詐欺行為」というものに鋭敏だったのだが——その鋭い感受性には「祈り」と通じあうものがあつた。それは、人間が孤独のまま生と存在と宇宙に直面するときに、無意識の裡に表す一つの形だといふことができるのである。

苦悩するもの、不正、悪、不義、醜さ、不自由、不平等を祈るように凝視するものの眼差しはどんなものであろうか。嬰兒のように無邪気に澄みわたっているだろうか、それとも疲労困憊して鬱屈した濁りをやどしているのだろうか。恐らく両者が共存しているであろう。彼らは自己と他者を侮蔑することも、怒ることも、放擲することもできない。彼らはすべてを引受けなければならない、いや少くとも引受ける覚悟を持ちつづけなければならない。それを宿命と呼んでもよいが、端的に日々のなんでもない労働と忍耐でしかないのだ、というべきであらう。あるときには澄み、あるときには暗い眼差しがのぞいても、その眼差し自体を当人は自覚できるはずがない。それは生の燃焼の一現象であり、耐えている姿勢を示す小さな窓である。

カフカは忍耐すら忘れて忍耐しつづけた作家であつた。勿論多くの人々がそうである。